

いきいき同窓会:デジタル改革の軌跡

新しい風を巻き起こすシニアたちの挑戦

船橋市いきいき同窓会。その名前には、「いつまでもいきいき」という願いが込められている。この会は、1984年市民大(当時の老人大)の修了生たちによって発足した。「会員相互の親睦を深め、心身の健康を保ち、生きがいを見つける場を作り、地域社会に貢献する」という大きな目的を掲げ、活動を広げてきた。

当初は活気に満ち、メンバーたちは同窓会を通じて新しい友人を作り、趣味を共有し、学びを深めながら第二の人生を楽しんでいた。スポーツ大会や文化活動、同好会の立ち上げといったイベントは次々と企画され、地域におけるシニア世代の輝かしいモデルケースとして注目を集めていた。

しかし、月日が流れるにつれ、特にコロナ禍以降、いきいき同窓会は徐々に変化の波に飲み込まれる。会員の高齢化が進み、新しい修了生がなかなか参加しなくなった。紙の会報や電話・郵送の連絡を中心としたコミュニケーション・運営では、時代の流れに追いつけなくなっていったのだ。

ある日、年次総会で発表された現状報告に、会場は静まり返った。

「昨年、会員数は30%減少しました。年次行事、同好会の活動も半数が休止状態です」

「このままでは、いきいき同窓会は消えてしまうかもしれません」

静けさの中、会長の角田洋子さんは席を立った。彼女の表情は真剣そのものだった。

「このまま終わらせるわけにはいきません。私たちは、この会を未来へ繋ぐ責任があります」

洋子さんは、現状をただ憂うのではなく、新しい方法で会を立て直す必要性を強く感じていた。そこで彼女が目をつけたのが、「デジタル化」だった。

「デジタルなんて難しい」「自分には無理」といった声が上がると、洋子さんはこう語った。

「私たちだって、学べばできる。大事なものは、挑戦する気持ちです。いきいき同窓会の『いきいき』は、前向きな一歩を踏み出すことから始まります!」

こうして洋子さんを中心に、いきいき同窓会のデジタル改革が始まった。ホームページの開設、PC研究会・スマホ教室の立ち上げ、会員名簿のデジタル化、デジタル担当者制度、会報のデジタル化、そしてE-Sports同好会の設立……すべてが、小さな一歩から始まった挑戦だった。

この物語は、いきいき同窓会が時代の波を乗り越え、再び活気を取り戻すまでの軌跡を描いている。挑戦し続けた彼らの姿は、「何歳になっても未来を変えられる」という希望の証である。

第一章:ホームページ開設への挑戦

洋子さんが最初に目をつけたのは、ホームページの開設だった。しかし、その提案に対する周囲の反応は決して、前向きではなかった。「私たちにそんなことができるの?」「機械は苦手だし、難しそう…」そんな声があちこちから聞こえた。洋子さんの表情に一瞬の寂しさがよぎる。しかし、その後すぐに強い意志が目に宿り、彼女は一言こう語った。

「私たちがやらなければ、誰がやるの?」

その言葉には力があつた。ただのアイデアではなく、会の未来を真剣に考えた彼女の決意がにじみ出ていた。この言葉に心を動かされた5人のメンバーが「やってみよう」と立ち上がった。こうしてゼロからのスタートが切られることになった。

だが、現実には厳しかった。集まったメンバーは全員、ホームページの作成経験どころか、パソコン操作自体に不慣れな人ばかりであった。必要な知識は誰も持っていなかった。そんな時、偶然にもホームページ作成講座を開いてくれる谷合先生に出会うことができた。この出会いは、まるで天から差し込む光のように感じられた。さらに、インターネット検索やYouTube動画を参考にしながら、試行錯誤の日々が始まった。

毎月開催される勉強会では、進捗が遅れるたびに焦りや不安が募った。ある時は、複雑な設定がどうしても上手くいかず、メンバー全員が「もう無理かもしれない」と肩を落としたこともあった。しかし、そんな時に洋子さんが掛け

る「一歩ずつ進めばいい。焦らなくて大丈夫」という言葉は、不思議な力を持っていた。その言葉に背中を押され、皆が再びパソコンの画面に向かう。少しずつだが確実に前進していった。

そんな中、新たな風が吹き込む。企業でシステム部門にいたパソコンに詳しい正和さんと、Webデザインに興味で取り組んでいる美佐さんが新メンバーとして加わったのだ。正和さんは WordPress の経験を活かしてサイトの構造を整え、美佐さんは写真やバナーのデザインを担当した。その姿に、他のメンバーも刺激を受け、学ぶ意欲がさらに高まった。「二人が加わったおかげで、まるで新しいエンジンが見ついたみたいだね」とメンバーの一人が笑顔で語った。

数か月の努力を重ね、ついにホームページが完成した。その時の達成感は計り知れなかった。画面に映し出されたのは、同窓会の行事予定、楽しい写真、そして会員たちの温かい声。それだけではない。オンラインでイベントに申し込みができる仕組みも導入されていた。「こんなことが私たちにできるなんて!」と、会員たちは驚きと感動を隠せなかった。

ホームページが無事に完成し、理事会での発表も盛況のうちに終わった。しかし、そこで喜びに浸る間もなく、新たな課題が次々と浮かび上がった。

「ホームページができたのは素晴らしいけれど、なかなかたどり着けない」という声が寄せられたのだ。特に高齢の会員たちにとっては、URL を入力すること自体が壁となっていた。スマートフォンやパソコンの基本操作に慣れていない人が多く、検索エンジンで「いきいき同窓会」と入力しても、思うようにホームページが見つからないという問題が頻発した。

さらに、「やっとホームページにたどり着いても、ブックマークの方法がわからない」という課題も浮上。これにより、次回訪れる際には再び検索を繰り返さなければならず、「面倒だからもういいや」と諦めてしまう人もいた。メンバーの一人は、「せっかく良いホームページを作ったのに、これでは宝の持ち腐れだ」と頭を抱えた。

この状況を打開するために、洋子さんたちは理事会で毎回 10 分間の時間を確保し、「ホームページの見方・使い方講座」を実施することを決定した。理事会の冒頭で、理事全員がホームページにアクセスする練習を行い、その後、ブックマークの方法やオンライン申し込みの操作手順を実演した。

特に高齢者向けには、スマートフォン画面をプロジェクターに映し出し、実際の操作を一つひとつ丁寧に説明することが功を奏した。「ここをタップするとメニューが開きます」「次に、このボタンを押してください」という具体的な指導により、少しずつ理事たちのスキルが向上していった。理事たちが学ぶ姿を見て、会員たちも「自分たちにもできるかも」と挑戦する意欲を持つようになった。

毎回の理事会での練習や支援策の導入により、次第に会員たちのホームページへのアクセス数が増えていった。「私でも使えるようになったよ」「写真が多くて楽しい」といった声が多く寄せられるようになった。普段、行事に消極的だった会員が「申し込みが簡単だったから行ってみようかな」と参加を増やし始めたのだ。さらに、活動の様子が分かりやすく伝わることで、新たな仲間も増え始めた。メンバーの一人は「ホームページを見て、やっぱりここは楽しい場所だと思った」と語り、その言葉にメンバー全員が胸を熱くした。

洋子さんは語る。「ホームページを作ることは大変でした。でも、それ以上に、みんなで挑戦して完成させたという事実が、この会に新しい風を吹き込んでくれたんです」。こうして、いきいき同窓会のデジタル改革の第一歩は大きな成功を収め、次の挑戦への意欲が湧き上がっていくのだった。

第二章:PC 研究会が生む“教える喜び”

ホームページ開設の成功がいきいき同窓会に新たなエネルギーをもたらした後、洋子さんはその勢いをさらに広げるべく「PC 研究会」の立ち上げを提案した。「パソコンをもっと知りたい」「使いこなせるようになりたい」といった声を受け、初心者向けの基礎コースが開講された。

研究会のスタートは「電源を入れるところから」というシンプルながらも大きな一歩だった。中には「電源ボタンがどれだかわからない」「マウスがうまく動かせない」といった声もあったが、快く講師を引き受けて頂いた真藤先生の懇切丁寧な指導や塚本さんを始めとするサポート役のメンバーが優しく声をかけることで、徐々に不安を解消していった。

「今までできなかったことが、自分の手でできるようになった!」という瞬間、参加者たちの目は輝き、自然と笑顔が広がった。PC研究会会員の宇都宮さんは、「子どもや孫に頼らなくても、メールが送れるようになりました」と涙ながらに喜びを語り、その姿に他のメンバーも胸を熱くした。

参加者たちは、講義だけで終わらず、自宅での予習・復習に積極的に取り組むようになった。「この間できなかった部分をもう一度やってみたら、少しだけ進歩できた!」と話す人が増え、徐々に自信をつけていった。特に、自分の名前を入力したり、文字の大きさを変えるといった基本操作を練習することで、パソコンとの距離が一気に縮まっていった。

「この機能も知りたい」「家計簿を作る方法があれば便利そう」といった要望が次々と寄せられたことで、研究会は基礎コースに続き、ステップアップコースを設けることに。ここでは、表計算ソフトで日々の記録をつけたり、写真編集ソフトで思い出をアルバムにする技術を学ぶなど、日常生活に役立つ内容が取り入れられた。

さらに、マスターコースでは「動画編集をして孫にプレゼントしたい」「ホームページの一部を自分で作りたい」といった挑戦的なテーマが取り上げられるようになり、参加者たちの意欲はますます高まった。

サポート役を務めた中級者の塚本さんは、初めて人に教える立場に立ち、驚きと喜びを感じたという。「教えることで、逆に自分の理解が深まりました。相手の『分かった!』という笑顔を見ると、本当に嬉しいんです」と語るその表情は輝いていた。こうした“教える喜び”は研究会全体に広がり、参加者同士で教え合う文化が自然に生まれていった。

研究会が終わった後も、会員たちは自主的にグループを作り、学び合いを続けた。近所のカフェに集まったり、オンラインで画面を共有しながら練習をしたりと、その熱意はとどまることを知らなかった。ある参加者は、「一人では諦めてしまいそうなことも、みんなでやると楽しく続けられる」と話し、こうした学び合いの輪が、PC研究会を支える大きな柱となった。

年末に開かれた忘年会では、自然とPC談義が話題の中心となった。「孫から褒められたんだ」「最近、メールに写真を添付できるようになったよ!」といったエピソードが次々と披露され、笑いと驚きの声絶えなかった。その場には「来年も研究会を続けていきたい」という強い思いが満ちていた。

パソコンを使いこなせるようになったことだけが、デジタル改革の成果ではなかった。むしろその先にあったのは、教え合い、助け合い、共に成長していく喜びだった。その喜びを共有することで、いきいき同窓会の仲間たちの絆は、デジタルというツールを超えて強く深く結びついていった。

洋子さんが言う。「大切なのは、技術を学ぶことだけじゃありません。新しいことに挑戦し、できなかったことができるようになる過程を楽しむこと。それが一番の宝物です」。デジタル化の波が会の中に新しい命を吹き込んだとき、そこには「学ぶ楽しさ」「教える喜び」「成長する喜び」が満ち溢れていた。

第三章:スマホ教室が生む“つながる力”

PCだけではなくスマホももっと学びたいという会員の声に対して、広報部長の長澤さんが粘り強くNTTドコモと交渉を続け「スマホ」教室が開設された。初回の募集定員20名に対し、50人以上の応募が殺到した。「スマホをもっと使いこなしたい」というメンバーの熱意が感じられた。

講座では、基本操作から始まり、LINEでのメッセージ送信やスタンプの使い方、カメラアプリを使った写真撮影や編集などを実践。特に人気だったのは、「孫ともっと楽しく話す方法」セッション。参加者の山田さんは「孫が送ってくれた写真にスタンプを貼って返信したら、すごく喜んでくれた!」と満面の笑みで語った。

また、スマホのカメラ機能を使った「地域の四季を撮影しよう」というプロジェクトもスタート。メンバーが撮影した写真はホームページに掲載され、地域住民からも「こんなに美しい船橋の景色を見たことがない」と感嘆の声が寄せられた。スマホ教室は、ただのスキル向上にとどまらず、人と人、地域をつなぐ架け橋となっていた。

スマホ教室の中で、ゲームアプリを使った交流が始まった。「LINEでオセロを孫と対戦してみたら、なんと勝っちゃいました!」と話すのは、教室の常連、田中さん。負けた孫からの「おじいちゃん、次は絶対に勝つよ!」というメッセージに、心が躍ったという。

さらに、参加者の中には「健康アプリ」を活用してウォーキングの記録を共有するグループも誕生。「今日は5,000歩達成!」という報告に「すごい!」「次は私も!」と励まし合う声が LINE 上で飛び交った。こうした活動が、新たな交流と楽しみを生み出していった。

第四章:デジタルの力がもたらす変革

スマホ教室と PC 研究会。この二つの活動が、いきいき同窓会に思わぬ変化をもたらした。

スマホ教室では、最初は緊張して画面を見つめていた会員が、やがて「LINE で孫と写真を送り合えるようになった!」「地図アプリで迷わずに待ち合わせに行けた」といった小さな成功体験を語るようになった。その笑顔は、まるで子どもに戻ったかのような無邪気さだった。

一方、PC 研究会では「教える」ことの楽しさが広がっていた。ステップアップコースを修了した善正さんや桜井さんが、基礎コースの講師役に名乗りを上げた。「最初は自分が教えてもらうだけだったのに、まさか私が教える側になるなんて」と感慨深く語る姿も見られた。

こうした取り組みは、会の雰囲気を大きく変えていった。「何もできない」と思い込んでいた人たちが、「こんなにできるようになった!」と自信を持ち、「教えてもらう立場」から「教える側」へと自然に変わっていく。その変化は、会員一人ひとりの中に眠っていた可能性を引き出し、新しいつながりと活気を生み出した。

ある会員が語った。「昔は、会に参加してもただ受け身で、なんとなく時間を過ごしているだけでした。でも、今は違います。『自分にもできることがある』って思えると、会に行くのが楽しみになりました」。

洋子さんは、この変化を心から誇りに思っていた。

「大切なのは、技術を学ぶことだけじゃありません。新しいことに挑戦する喜び、そして、できなかったことができるようになる楽しさ。それが会員みんなを支える原動力になっているんです」

デジタル化という挑戦は、単に便利な仕組みを導入するだけではなかった。それは、会員一人ひとりの心に小さな火を灯し、その火が広がって大きな明かりになっていくプロセスだった。その光は、かつての同窓会の輝きを思い起こさせるとともに、新しい未来を切り開く希望となった。

この頃から、会のスローガンが自然と口にされるようになった。

「いきいき同窓会は、挑戦する仲間の集まりです」

その言葉通り、デジタル化の挑戦は、会の仲間をもう一度結びつけ、再び前進する力を与えた。洋子さんの挑戦は、ここからさらに大きな展開を迎えるのだった。

第五章:会員名簿のデジタル化がもたらす“見える化”革命

長年、紙ベースで管理されていた会員名簿には、いくつもの課題が潜んでいた。更新作業は膨大な時間と労力を要し、会費の納付状況やイベント参加履歴の把握も困難だった。また、「最近入会した会員の顔がわからない」「行事に参加しない人が増えている」といった声も次第に増えていた。

「このままでは会の活気が失われてしまう」——そんな危機感から、洋子さんは思い切った提案を行った。それが、会員名簿のデジタル化プロジェクトだった。

プロジェクトの中心となったのは、会計部の黒田さんだ。エクセルの使い方を学びながら、全メンバーのデータを細かく整理。個人会員とクラス会員（同じクラスで入会したグループ）をはっきり区別し、それぞれの会費納入状況や参加イベント履歴が簡単に確認できるようにした。

この仕組みによって、イベント企画時の準備が格段に効率化された。「このイベントはクラス会員向けに」「個人会員で興味を持ちそうな人に声をかけよう」といった戦略的な動きが可能になり、行事の成功率が高まった。

新たに加わった「行事参加履歴」の機能は、特に効果を発揮した。最近行事に参加していない会員が一覧で分かるようになり、役員たちはそのデータを元に連絡を取るようになった。「最近いらっやらないので、ぜひ次のイベントに!」といった個別のお誘いを通じて、多くの会員が再び活動に参加するようになった。

実際、長年姿を見せなかった田村さんがその仕組みを通じて復帰したことは、会の中で大きな話題となった。「メー

ルで届いたお知らせがきっかけで、久々に参加してみようと思った」と田村さんは笑顔で話す。その日から田村さんは再び同窓会の活動に積極的に関わるようになり、役員たちを喜ばせた。

デジタル名簿の“見える化”は、同好会活動の活性化にも大きく寄与した。名簿から趣味や興味を共有できそうな人を抽出し、新しい同好会の結成を提案。「近隣にこれだけ読書好きの人がいるなら、読書会を作りませんか？」「ウォーキングを趣味にしている人が意外に多いから、一緒に活動しませんか？」といったアプローチが功を奏し、参加者が増加。同好会で新しい仲間を得た会員からは、「会がさらに楽しくなった」との声が上がった。

さらに、こうした取り組みは会員の維持にも効果を発揮した。「自分がここに必要とされている」という実感を得た人々は、自然と会費を納入し、活動への参加率も上がった。

デジタル名簿を活用した新しい試みのひとつが、会員同士の誕生日を祝うメッセージ送信だった。「おめでとうございます！」という短いメッセージでも、会員たちは自分が会に大切にされていると感じ、つながりが深まったと話す。また、データを活用した地域別の声かけも始まり、近隣で集まりやすいグループが自然と形成された。これにより、「遠方だから参加が難しい」と感じていた会員も、地元での交流を楽しむようになった。

洋子さんは、デジタル化による効果を確信している。「会員の顔が見える、つながりが感じられる仕組みができたことが、会の維持と活性化につながった」と話す彼女の言葉には自信が満ちていた。会員名簿のデジタル化は、単なる情報管理の効率化にとどまらず、同窓会の未来を形作る原動力となっている。

こうして、デジタル化がもたらした“見える化”革命は、いきいき同窓会の会員たちを新たな一歩へと導き、さらなる絆を築く道を開いていったのだ。

第六章：妙高高原で燃え上がる“学びの炎”

洋子さんが次に計画したのは、妙高高原での「デジタル強化合宿」だった。「一度、集中して学ぶ時間を作りましょう！」という洋子さんの呼びかけに、会員たちは熱い反応を示した。普段、忙しい日常に追われる中で、じっくりと学ぶ時間を作ることが大切だと感じたからだ。これまでの学びの成果をさらに深めるための絶好の機会として、多くのメンバーが賛同し、最終的に6人のメンバーが集結した。

舞台となるのは、雄大な自然に囲まれた妙高高原の合宿地。四季折々の風景が美しい場所に、心身ともにリフレッシュできるような環境が整っている。朝10時、合宿が始まると、小奇麗な研修室に集まったメンバーたちは、緊張感と期待感が入り混じった表情で席に着いた。ノートパソコンを前にし、まさに学びの世界に足を踏み入れた瞬間だ。

最初のセッションとして、自分たちが日頃感じている課題を発表し合った。「オンライン会議に慣れない」「アンケート作成が手間」「会員への連絡がスムーズにいかない」など、さまざまな課題が挙げられた。その中で特に共感が集まったのは、「デジタル技術を使いこなせない」という声だった。

ファシリテーション役の斉藤さんがホワイトボードに全員の課題を書き出すと、それをもとに優先順位を決定。「最も身近で解決しやすいところから始めよう」と全員で合意し、Google フォームでのアンケート作成を学ぶことにした。この課題整理の時間は、メンバー同士の絆を深めるとともに、全員が同じ方向に向かうスタート地点となった。

斉藤さんが「それではこれから Google フォームでアンケートを作りますよ！」と元気よく声を上げると、会場には驚きと興奮の声が上がった。「そんなこともできるの？」と、普段は手の届かないと思っていたデジタル技術への好奇心が一気に湧き上がる。最初はうまくいかず、何度も失敗しては笑い合い、壁にぶつかるたびにお互いに励まし合いながら、一歩ずつ進んでいった。やがて、誰かが「できた！」と歓声を上げると、他のメンバーも一斉に拍手し、その場がひとつになった。その瞬間、学びの達成感が部屋中に広がり、メンバーたちの表情には自信と喜びが満ち溢れていた。

昼食後には、各自が事前に考えてきた「同窓会の活動をもっと便利にするためのアイデア」を発表する時間が設けられた。

「イベント告知をより魅力的にするため、簡単に作れるチラシテンプレートがあればいいのでは？」

「Google フォームでのアンケートを活用して、行事後に感想を集めたい」

「ZOOM を使って遠隔地の会員とも交流を増やせるのでは？」

メンバーそれぞれが提案するたびに、他のメンバーから質問やアドバイスが飛び交い、自然と新しいアイデアが生まれていった。この時間は、単なる発表の場を超え、メンバー同士が互いに刺激し合いながら、新たな方向性を模索する貴重な時間となった。

夕方からは、次なる挑戦として ZOOM の使い方講座が始まった。「オンライン会議の背景を変えるには？」という質問からスタートし、いくつかの応用技術にも挑戦していった。学んだ知識を活かし、あるメンバーが「背景を妙高高原の写真にしてみました!」と自慢げに発表した瞬間、参加者たちは爆笑し、会場は温かい笑顔に包まれた。普段の会議では味わえないような自由な空気が流れ、学びと楽しさが一体となった。

夜になると、参加者たちは温泉で疲れを癒しながら、交流会を開いた。「あそこのボタン、最初はわからなかったけど、やっとできたよ!」と、みんながそれぞれの成長を語り合い、次はどんなことに挑戦したいか、希望に満ちた会話が弾んだ。温泉で心も体もリラックスした参加者たちは、昼間の学びを振り返りながら、「今後、もっと進んだことに挑戦したい!」と、次々と意欲を見せ始めた。

合宿の最終日、いよいよ成果を発表する時間がやってきた。参加者たちは自分たちが学んだことを活かし、ミニプレゼン大会を開催した。「ホームページを更新して、次のイベント情報を載せてみました!」「Google フォームで参加アンケートを作りました!」と、ひとりひとりが堂々と発表する姿は、どれも素晴らしい成果を感じさせるものだった。発表を見守っていた他のメンバーや、参加できなかった仲間たちの目にも、熱い思いが伝わり、胸がいっぱいになった。

そのプレゼン大会を終えた後、妙高高原の夜空を見上げながら、洋子さんは静かに言葉を紡いだ。「皆さんの努力と情熱が、いきいき同窓会をさらに強くする。この合宿で得た知識や自信を、ぜひみんなで広めていきましょう」と。その言葉に、参加者たちは深く頷きながら、一層の決意を新たにした。

この合宿を通じて得たスキルと自信は、今後の会の活動に大きな変化をもたらすこととなった。ZOOM を活用した遠隔参加の勉強会、Google フォームでの意見収集、デジタルを活用した新しいプロジェクト提案など、数々の新しいアイデアが形になり、会全体の活動に活気を与えた。合宿で燃え上がった“学びの炎”は、いきいき同窓会の未来を照らす明るい光となり、どんどん広がりを見せていったのだった。

第七章: デジタル担当者が生む“頼れる存在”

活動がますます広がり、いきいき同窓会の仲間たちの意欲も高まる中、洋子さんは次なるステップを考えていた。デジタル化の波が会の隅々にまで広がり、「これからの活動をさらに進化させるためには、専門的なスキルを持った人々が必要だ」と感じたのだ。そこで、洋子さんは「デジタル担当者制度」を発足させることに決めた。

各部から1名ずつ選ばれたデジタル担当者たちは、それぞれの部が抱える課題を持ち寄りながら、同窓会全体のデジタル化を推進する役割を担うことになった。この取り組みには「自分たちの部の弱点を補い、全体を底上げする」という狙いもあった。メンバーたちは、初心者でも経験者でも構わないという条件のもと、「やってみます!」という前向きな姿勢を持つ人々が立候補。彼らの意欲に洋子さんは大きな期待を寄せた。

毎月開催されるデジタル担当者会議では、担当者たちが持ち寄った新しいアイデアや学びを共有する場が設けられた。会議の進行役を務めたのは、会の中でも非常に落ち着いた雰囲気を持つ伊藤さんだった。

まずは、各部の現状を共有することから始まった。それぞれが抱える課題は実に多様だった。

広報部:「イベント情報をどうやって効率よく伝えるかが課題。チラシ作成が手間で更新が遅れてしまう」

経理部:「会費の管理が紙ベースで、手間がかかるうえ、ミスが起きやすい」

文化部・同好会推進部:「参加者募集や進行方法にデジタルを取り入れたいが、どのツールを使えばよいか分からない」

この共有の場で、参加者たちは各部の抱える課題を知ることによって、「自分の部だけの問題ではない」と感じ、安心するとともに、解決の糸口を探る意欲が高まった。

続いて行われたのは、各部での現在のコミュニケーション方法の発表だった。

広報部:「イベント案内は主にメールと紙のチラシ。広報の送付が大変手間とコストがかかる」

経理部：「会員名簿はエクセルで管理しているが、データベース化されていなくて情報の更新に時間がかかる」

文化部・同好会推進部：「LINE グループで情報を共有しているが、参加者管理までは手が回らない」

これらの発表を通じて、各部が直面する「デジタルの壁」が具体的に浮き彫りとなった。同時に、「この部の方法は自分たちにも役立つそうだ」と気づく場面も多く見られた。

第2回目の会議では、各担当者が自部の課題に対する解決策を提案し合う時間が設けられた。例えば、経理部の課題に対して広報部が「Google フォームを使えば、会員情報の収集と管理が簡単になりますよ」とアドバイスを送る場面や、文化部が「LINE のオープンチャットを利用すれば、参加者同士のやり取りが活発になります」と提案するなど、部を超えた知恵の交換が行われた。

その中でも特に注目すべき存在となったのは、広報部の瀬戸山さんだった。彼女はかつて、パソコンに触れることさえも怖いと思っていた。しかし、今では他のメンバーに LINE の使い方を教える立場となっていた。その変化は目を見張るものがあり、彼女自身も次第に「デジタルを使いこなせる自分」に驚きと喜びを感じていた。「私は最初、パソコンすら触れなかったけど、今は他のメンバーに LINE の使い方を教える側になっています。最初は自信がなかったけど、みんなで支え合っただけでここまで来たんです」と語る瀬戸山さんの言葉には、達成感と感謝の気持ちがにじみ出ている。

彼女の成長は、ただ単にスキルを向上させるだけでなく、同じようにデジタル化に対して不安を抱いていたメンバーたちにも勇気を与えた。瀬戸山さんが前向きに取り組む姿勢を見た多くのメンバーが、「私もやってみよう!」と一歩踏み出すきっかけを得たのである。

今後の方向性について何回かの会議を通して、全員で話し合いがもたれた。

その結果、以下の3つが重点方針として定められた。

- ・情報発信の強化：広報のデジタル化を目指す。ホームページや SNS を活用し、イベント情報や活動報告を迅速かつ広範囲に届ける。

- ・効率化の推進：Google フォームやクラウドサービスを活用して、情報管理の手間を軽減する。

- ・スキルアップの場の提供：担当者向けの勉強会を定期開催し、スキル向上を図る。

また、それぞれの部が抱える弱点を補強するため、担当者間の連携を強化し、困った時に助け合える体制を整えることも決まった。

こうして始まったデジタル担当者制度は、会の中に「頼れる存在」を次々と生み出していった。担当者同士が学び合いながら知識を広め、それが部門全体の力となる。その結果、会全体の活動が効率化し、より多くの人が楽しめる場へと変わっていった。

洋子さんは目を細めながら語る。「それぞれの部が抱える課題を共有し、解決策を見つける姿は、まさに会員同士がつながり合っている証拠です。この制度が私たちの未来をさらに明るくしてくれると信じています」。その言葉には、デジタル化を進めた先にある、さらなる可能性への期待が込められていた。

デジタル担当者が生み出す「頼れる存在」は、やがて会全体を支える大きな力となり、いきいき同窓会の新たな未来を切り開いていくのであった。

第八章：コミュニケーション革命が生む“新しいつながり”

いきいき同窓会におけるデジタル改革が加速し、LINE、Chat、Google サイトなどのツールが次々と導入され、その効果は驚くべきほどに会員同士のコミュニケーションを変革した。これまでメールや電話でのやり取りが主流だった時代から一歩進み、情報がリアルタイムで共有される新たな時代が訪れた。

LINE では、各部やプロジェクトごとに専用のグループが作られ、ちょっとした相談やアイデアの共有が即座に行われるようになった。「次回の会議、午後 3 時からに変更できますか?」という問い合わせや、「その案、すごくいいですね!」という賛同のメッセージが飛び交い、会員同士の距離感が一気に縮まった。それは、単なる仕事のやり取りにとどまらず、親しみを感じさせる瞬間が次々と生まれる場でもあった。

さらに、LINE を活用した「お誕生日お祝いグループ」の誕生が、会の温かな一面を強調した。「今日は善正さん

のお誕生日です!みんなで祝いメッセージを送りましょう!」という呼びかけに応じて、次々にスタンプやメッセージが送られる光景は、会の絆を感じさせる瞬間だった。善正さんが「こんなに祝ってもらえるなんて」と感激の涙を流すシーンは、デジタル化がもたらした温かい新しい形のつながりを象徴していた。

もっと専門的な議論が必要な場面では、Chat が活用された。ここでは、プロジェクトの進捗報告や課題解決のアイデアが即座に共有され、効率的に物事が進行していった。「イベントのポスター、このデザインでどうですか?」という意見交換や、「会場の配置図を作りましたので、確認お願いします」といったやり取りが活発化し、会の運営は一層スムーズに。デジタルツールが、単に情報をやり取りするだけでなく、プロジェクトの進行を加速し、メンバー全員の力を引き出す舞台となった。

そして、Google サイトには会員専用のポータルが開設され、会のスケジュールやイベント情報、活動報告など、重要な情報がいつでも簡単にアクセスできるようになった。特に、イベント後に公開される写真アルバムは大好評で、会員たちは「この写真、私が撮ったんですよ!」と誇らしげに語り、笑顔を見せていた。それぞれの参加が新しい思い出となり、会員たちの間でのつながりがさらに深まっていった。

第九章:つながりが創る未来

こうしたコミュニケーション革命は、いきいき同窓会に新しい風を吹き込み、その変化を感じる声があちこちで聞かれるようになった。イベントの案内が瞬時に届くようになり、参加者数は飛躍的に増加。「最近、こんなに会が活発なのを見たのは初めて」と、多くの会員がその変化を実感していた。

ある日、洋子さんが会員の一人である佐藤さんに声をかけられた。「洋子さん、実は最近、孫と話すのが楽になったんです」と佐藤さんは笑顔で話し始めた。彼の孫は高校生で、普段はスマホばかり触っていることに不満を感じていたという。だが、同窓会の活動を通じてスマホや LINE を使いこなすようになった佐藤さんが、孫と同じゲームアプリで遊び始めたのだ。「最初は教えてもらう側だったけど、今では一緒に対戦するようになりました。おかげで孫との会話が増えて、本当に嬉しいです」。

このエピソードを聞いた洋子さんは、デジタル化が単なるツールの利用にとどまらず、人と人、そして世代間のつながりを深める力を持っていることを改めて実感した。「デジタルは冷たいものだと思うかもしれませんが、実は人をつなぐ大きな力を持っています。それを実感できたのが、この1年でした」と洋子さんは感慨深く語った。

デジタルツールは物理的な距離を超え、心と心をつ結びつけ、メンバーたちの絆を一層強固なものにしていた。特に、離れて暮らす地方の会員からも「オンライン会議のおかげで、久しぶりにみんなと話せました」と感謝の声が届いた。デジタル化は、孤立しがちな人々を再びつなぎ、会の活動をさらに充実させる原動力となったのだ。

今では会員たちが「次はこれをやりたい!」と自発的に提案する場面が増えている。例えば、定例会で若手の会員が「地域の子どもたちと一緒に遊べるイベントを企画したい」と発言したことがあった。この提案に高齢の会員たちも「子どもたちと昔の遊びを教え合うのは面白そう」と賛同し、新たなプロジェクトが動き始めた。

一方で、デジタル担当者たちが中心となり、イベント管理ツールを使った「誰でも簡単に申し込みができるシステム」の導入も進められた。その結果、以前は煩雑だったイベントの運営が大幅に効率化。会員たちが気軽に参加できる環境が整い、ますます活発な活動が展開されていった。

いきいき同窓会の未来は、もはや個々の参加者の手の中にある。それは、単なる会の成長にとどまらず、世代を超えた交流や地域社会とのつながりをも育むものだった。ある時、地域の商店街とコラボしたイベントが話題を呼び、近隣住民も巻き込んだ大規模な交流会が開催された。「こんなに地域の人たちと交流できるなんて思ってもいなかった」と参加者たちは笑顔を見せた。

洋子さんは、これらの成果を見ながら改めて思う。「デジタル化は、もはや単なる手段ではなく、人と人、世代と世代、そして地域をつなぐ『絆の力』そのものです」。その言葉通り、いきいき同窓会は、デジタル化を通じて新たなつながりを生み出し、その絆を強くすることができたのだ。

その日、佐藤さんは孫と撮ったツーショット写真をグループチャットに投稿した。「こんな風に笑顔で写真を撮るのは何年ぶりだろう」と書かれたその投稿に、会員たちは温かいコメントを送り合った。そこには、デジタルの力が生み出す新しい未来の形が確かにあった。

第十章:会報デジタル化の挑戦

いきいき同窓会が進めるデジタル改革の中で、次なる大きな挑戦となったのが「会報のデジタル化」だった。長年、会員たちに親しまれてきた紙媒体の会報は、会の歴史と伝統を象徴するものだった。しかし、時代の変化とともに、印刷コストの増加や発送作業の負担が膨れ上がり、会の運営にとって一つの大きな課題となっていた。そんな中、洋子さんは決断する。「今こそ、デジタル化に踏み切る時だ」と。これは、単なるコスト削減を超え、会員たちに新しい価値を提供するためのものだった。広報部長の長澤さんをリーダーとした一大プロジェクトがスタートした。

このデジタル化のプロジェクトは、単なる紙からデジタルへの移行ではなかった。それは、会報が持つ情報の可能性を最大限に引き出す新たな試みだった。慎重に進められた計画の中で、最初の一年は紙版とデジタル版を並行して提供するという段階を踏んだ。会員たちにデジタル版に触れてもらい、その利便性や楽しさを実感してもらうことが目的だった。紙の会報には載せきれなかった写真や動画、リンクなど、デジタルならではのコンテンツが追加され、会報の内容が一層豊かになった。

会員たちにとって最初の一步は小さな戸惑いもあったが、徐々にその便利さに気づき始めた。特に、「デジタル版の方がずっと楽しい!」という声少しずつ広がっていった。写真やイベントの様子を生き生きと感じられ、リンクをクリックすることで、さらに多くの情報にアクセスできる新しい体験は、会員たちの期待を超えるものであった。初めは紙版を選んでいただいていた会員も、次第にデジタル版を選択するようになり、3年目にはほとんどの会員がデジタル版を選ぶようになるという大きな転換が訪れた。

デジタル化は、ただ便利になったというだけではない。会の活動がどんどん広がり、つながりが強くなったことが、最も大きな成果だった。会報に掲載されたリンクから、イベントの申し込みがすぐに行えるようになり、より多くの会員が積極的に参加できるようになった。また、写真や動画を通じて、リアルタイムでの活動報告が可能になり、会員間のコミュニケーションが格段に活発になった。「これで、遠くに住む会員ともつながりを持ちやすくなった」と喜びの声があがり、会の絆が一層深まった。

そして、デジタル化による最大の効果の一つが、コストの削減と環境への配慮であった。印刷や郵送にかかる費用は大幅に減り、その分を他の活動に充てることができるようになった。また、会員たちは「私たちが地球に優しい取り組みができています」と、環境に配慮した活動への誇りを感じるようになった。この変化は、会員一人ひとりの意識にも大きな影響を与え、環境への責任を果たしながら、より良い未来を築くという意義が、デジタル化を推進する原動力となった。

洋子さんは、会報のデジタル化が単なる形式的な変化ではなく、会全体の意識改革を促したと感じていた。「これからも進化を続け、さらに便利で、もっと楽しい会報を目指しましょう」と語る洋子さんの言葉に、会員たちは新たな可能性を感じ、次のステップに向けて意欲を燃やしていった。この会報のデジタル化がもたらした変革は、いきいき同窓会にとって、新たな時代の始まりを象徴するものとなったのである。

第十一章:E-Sports でつながる新時代

デジタル改革が成熟し、いきいき同窓会の活動が軌道に乗る中、新たな挑戦が動き出していた。それは、「E-Sports 同好会」の設立だった。

発案者は、同好会推進部の看舎さん。「デジタルツールを活用した新しい形の交流を提案したい」と立ち上がり、洋子さんも「面白い!やってみましょう」と即座に賛同した。E-Sports と聞いて最初は戸惑うメンバーも多かったが、看舎さんは「まずは誰でもできるゲームから始めましょう」と提案。初心者向けに、ボウリングや卓球、簡単なリズムゲームを取り入れた。

最初の体験会では、「ゲームなんて初めてだよ」と笑いながら操作を覚える参加者が続出。しかし、実際にプレイしてみると、「思ったより簡単で楽しい!」「これ、私にもできる!」と喜びの声が広がった。

当初、参加者はわずか 8 人の小さなサークルだった。しかし、「孫と遊べるようになりたい」「新しいことに挑戦したい」という思いが口コミで広がり、次第に参加者が増えていった。月例会では対戦形式のミニ大会が開催され、勝った人も負けた人も笑顔で楽しむ様子があふれていた。

E-Sports の活動は、メンバーたちの健康にも大きな影響を与えた。「ゲーム中は自然と体を動かすことが多く、終

わった後に気持ちがすっきりする」と語る参加者もいれば、「普段あまり話さなかった人とも、ゲームを通じて親しくなれた」と新たなつながりを喜ぶ声も聞かれた。

活動を続けるうちに、参加者数はどんどん増え、設立から1年で会員数は100名を突破。ゲームの種類も増え、初心者向けから上級者向けまで多様なプログラムが用意されるようになった。

E-Sports 同好会は、単なる趣味の場を超えて、メンバー同士が年齢や経験を超えて交流し、新しい価値観を共有する場となった。洋子さんはこう語る。「私たちがこんなにも楽しみながら成長できるのは、チャレンジする気持ちを忘れなかったから。この会を通じて、人生の新しいステージを見つけてもらえたらうれしいです」。

こうして、いきいき同窓会はまた一つ、新しい可能性を切り開いた。E-Sports 同好会で築かれる笑顔とつながりは、同窓会全体の新たな活力となり、次の挑戦へのエネルギーとなっている。

エピソード:さらなる飛躍を目指して

デジタル化が進む中で、いきいき同窓会は、もはや単なる「過去を懐かしむ場所」ではなく、明日の未来を創り出す「未来を創る場」としてその姿を一新していた。かつての懐かしい思い出が蘇る場所から、今では新しい挑戦の舞台へと進化し、会員一人ひとりがその未来を共に築く一員として力強く歩み始めていた。

ある日、洋子さんが開催した会合で、メンバーたちに向けてこんな問いかけが投げかけられた。「これからの3年で、私たちは何を目指すべきでしょうか？」その問いに、会場は静まり返ったが、次の瞬間、あちこちでアイデアが飛び交い、熱気が会場を包み込んだ。

「オンラインで全国の卒業生とつながるプロジェクトをやりたい！」

「若い世代と一緒に学ぶ場を作りましょう！」

「地元のお祭りで、デジタル化の取り組みをPRできたらいいね！」

それぞれのアイデアには、ただの夢物語ではなく、確かな希望と情熱が込められていた。未来を見据えるその目は、まさに次の一歩へ踏み出すための力強い一歩だった。

そして、会合の最後、洋子さんは深い思いを込めてこう語った。「私たちは、これまでにたくさんの壁を乗り越えてきました。そのたびに、私たちは強くなり、つながりが深まりました。これからも、デジタルの力を駆使して、私たちは未来を創り続けます。いきいき同窓会の名の通り、いつまでもいきいきと！」

その言葉に、会場中が一斉に拍手を送った。鳴り響く拍手の音は、希望と期待に満ちた未来の音だった。会員たちの心は一つとなり、次なる飛躍を目指して進んでいく決意を新たにした。

未来への道標

洋子さんとメンバーたちの挑戦は、デジタル化が年齢を超えた無限の可能性を引き出す証となった。いきいき同窓会の改革は、単なる技術革新にとどまらず、地域社会や世代を超えたつながりを生み、さらに未来に向けた大きなインパクトを与え続けている。

「私たちはまだまだ挑戦する。年齢なんてただの数字だ！」と笑いながら語る洋子さん。その言葉通り、彼女の後ろ姿は、会の新しい時代を象徴する光そのものであり、会員たちに無限の可能性を信じさせる力強い存在となった。しかし、その挑戦の炎はまだ消えることなく、これからも燃え続ける。未来を創るために。

最後に伝えたいこと

「できるかな？」という不安から始まった一歩は、今では大きな波となり、いきいき同窓会をより豊かな場へと進化させている。その波は決して途切れることなく、今後も広がり続けていく。会員たちはその波の中で、何度でも新しい自分に出会い、成長し続けるだろう。

そして、洋子さんが最後に語った言葉が、すべてを象徴している。「私たちは挑戦することで、いくつになっても可能性を広げていける。いきいき同窓会が、それを証明しています」

これからも、いきいき同窓会の物語は続いていく。年齢も、経験も、限界も飛び越え、明日の新しい自分に出会うために。